

第 19 回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：令和元年 9 月 12 日（木）15:00～17:15
2. 場所：中央合同庁舎 8 号館 8 階特別大会議室
3. 出席者
 - (1) 構成員
相澤座長、長我部委員、瀧澤委員、野路委員、山本委員
 - (2) 内閣府
原沖縄振興局長、田村総務課長、中島次長、宮腰企画官
 - (3) OIST
バックマン首席副学長、吉尾 COO、芝田副学長、ピーチシニアアドバイザー

4. 議事要旨

議事 1 2020 年度概算要求について

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

(財務省予算執行調査について)

OIST の基本構想では、どうしても PI の数が表に出てくるため、今までも PI 1 人当たりどのような予算措置かということが議論されてきた。東工大と OIST の数の根拠をそろえなければいけないと主張されるのは良いと思うが、数字の扱いについて、今回 (PI に研究者の数を含めた数字) のようにそれぞれ違った観点で数字を出すと、混乱してしまうため、十分に注意する必要がある。

議事 2 OIST の 10 年後見直し

各委員から主に以下のような指摘・意見があった。

(前回議論の整理について)

コンプライアンスやリスクマネジメントについてはどこの組織が対応しているのか。また、個別のコンプライアンスの責任者が学長に報告するだけではなく、トップマネジメントの人たちが学内全体に共有し、反映していくことが重要。

(評価の視点：各論「財務」について)

補助金の予算配分の表 (資料 2 - 3 P12) について、人件費や施設整備費が別建てになっていると、全体の補助金額の構造が分かりにくい。

今後の経営的な自立を考えた時に、政府の補助金が増えなかった場合も、教育研究活動を推進するためには資金が必要である。その資金を獲得するため、ファンドを作るのは良いことだと思うが、それに加えて研究者に外部資金獲得に向けて努力してもらうことも必要だと思う。

ハイトラスト・ファンディングはいつまでも現状の比率で措置されるとは限らず、自立的な経営という観点と密接に関連している。競争的資金に関しては努力をして大きな成果を上げていることを示していく必要がある。

共同研究で民間企業から資金を潤沢に獲得できて、OIST の知見を社会に還元できるようになるには

まだ時期が早い。共同研究には企画機能を持つスタッフが重要であり、マサチューセッツ工科大学（MIT）には企画書を作成できるスタッフが多くおり、企業も集まってくる。今すぐやろうとしても難しいので、OIST はまずは基礎研究に特化しつつ、10 年後か 15 年後か分からないが、回り回って社会のイノベーションへと発展していけば良いと思う。ある程度の段階へ来たら、時代背景も踏まえながら MIT のような形を目指すのか検討すれば良い。

経営そのものを本当に自立的に行うかというよりは、努力目標を持って、外部資金を獲得する姿勢をしっかりと示すことが重要。その中で、今回説明のあったファンド（米国における OIST ファンド）の設立に努力されたことは、今後の検討においても重要な視点だと思う。

イノベーションを生み出すための産学連携の仕方については、仕組みが必要であり、これからの構想の検討に当たり、OIST からもっとしっかりしたものを提示していただけないかと期待している。

以上